

である、菊と朝顔やダリアの栽培を女生の科外に指導して毎年競美會をやるといふ腕きの博物の先生である、このたび寛平法皇一千年御遠忌に際して、其記念としてこの一冊が生れた、洛中での花の名所ことに厚物では天下無双の稱のある御室の櫻を解説し、同時に美はしきコロタイブ寫眞版をつけた。説明は菊版四三頁。圖版二十八。いかにもうるはしい寫眞が出来た折にふれて推奨すべき好著であると思ふ。(藤田)

雜報

○中央アジアの風俗

ウオルガから東に出て、サマラを過ぐれば既に一望廣漠たるステツプとなる、行けども行けどもステツプ亦沙漠サマラから三晝夜汽車で乗り通して一本も木がない、驛の近くに人工を以て水を撒給したものが生てゐるのみ。自然の低い波状地には貧弱な草があるばかり、それも六月になると枯れてしまう、土壤は加里を分泌して到る所白くなつてゐる、然しアルイシユ驛をこえると、環境は全く一變し雜草が生えて植物が繁る。カラガチ、白楊、ニセアカシヤ、楓等の街路樹がしげつてステツプとのコントラストのきついに驚かされる。

カラガチ樹は橙の如く圓く且偉大な成育をとげ大空を壓し其樹の蔭は盛夏と雖も太陽を透さない、其材は堅牢なること桑と並び稱せらるゝ。

中央アジアといへば、西はカザクスタンから裏海に達する廣漠無限のステツプ地に連り、東は屏立せる高峰連綿を以て支那と境し、最高ハンテングリ、二萬四千尺その西にフェルガナの豁谷地があり、パミールの高原は大小の河原となつてゐる、氣候は平地と山地とによつて相違し盛夏は六月から八月、嚴寒は一、二月、アハラ、ヒザ方面は盛夏攝氏四十度に近づくが冬季には○下三十度以下、雨は秋より翌年四月までふるが五月から九月の間は少い。

地震の多いことは我邦に劣らざるものがある。

人情風俗凡そ中央アジア程集團せる多數民族が雜然交錯して居る所は少い、宗教は共通するけれども、その外の言語や習慣の異ひ方がきつい。

土につく民と遊牧民との間の相違が最も目につく、遊牧民はユルタといふ直徑八尺乃至十尺内外の天幕張の小屋に家族同棲す、天幕の上等はフェルト製で一千留にも上るものがある、土地を掘下げて骨組をたてるので嚴寒にも寒さを感じない、水草を逐うて移る時はユルタを車一臺にのせてゆく、この群の中に、コサツク、キルギス、トルコマンの三種がある。土につく民はダヂク人及ウスベク人を主とし、トルコマン及キルギスの一部である、ウスベク人は最も早く土着した。アハラ市は彼等の本據で、土城を有し、防壁に住居する様子は支那に類する。

エミール(王)は人民を撫育するよりも、庶民を驅使鞭笞し

たもので、革命前迄は笞刑の具が宮殿に飾られてゐた、帝政露國の時にも、ブハラとヒヅとは内政の干渉をうけなかつたから、行政は紊亂した。

衣服は一律に支那人の着る袴の如き下衣の上に筒袖の長い絆天をまとひ、左祖して兵古帯を以て之を束し、袖の如きトルコ帽の上に長さ約五尺の白布を以て鉢巻にまきつける、之をチャルマといふ、履物は主として革製の長靴又はダツタン靴である。

ウスベク婦人は頭に襦襦をかぶり、馬の尾を以てつくつたチャードラといふ黒布を頭に覆ふけれども、トルコマンやキルギスの女は顔を暴露するタジクの婦人は都邑のもの顔はかくすが、山間は露出する、一夫多妻主義は普通のみとめられてきたが、ソウイェツト治下になつて之を禁じた。併しやはり買妻の慣習はこのころ、蓋し回教徒婦人が覆面する習慣は回教の教義に基くのではない、寧ろ古い波斯の古風俗が傳はつたのであらう。

常食は米と麵麩である、米は羊肉と共に油を以て炙るが如くにして煮る、之をプローフ、といひパンは薄く圓形にやき鹽をまぜる、之をレビヨシカといふ。羊の肉の串さしの焼いた料理を貴ぶ、ウドンやマンヂウのあるは支那に似る、茶は綠茶で喫茶店をチャイハナと稱し、床の上に赤毛氈をしき履物をはいたまゝで安臥して一碗の綠茶を飲み、半日を費やす様子は全く世外の人に似たものといへる。

沿革 中央亞細亞に於て第八世紀乃至十世紀頃にアラビヤベルシヤ文化が發達しかけた時第十二世紀に北方よりチュールク人が南下し始め第十三世紀に成吉思汗が侵入して文化の根本を枯らした。タメルランが波斯文化を輸入したけれどもウスベク時代に入つてから、地方豪族の争が絶えず、宗教が學問の發達を阻止したので、革命前は僅に百分の二がトルコ文字を以て書いた文章を讀むに過ぎなかつた、革命後大に教育に盡力し二五%まで字を書くやうにするといつてゐるが、どうか、但し文字をラテンアルファベットにするやうにはなつた。

○世界の絹

人絹の製法に四つの區別がある。一、ウ

イコーヌ法といふは最も古く發明されたもので木材バルブ又は棉バルブを原料とし、之を苛性曹達に浸し、二硫化炭素を加へて水に溶解し、之を細い孔から稀硫酸液に押出して糸とする、二、醋酸纖維素法は棉花の屑(リントナー)を精製したものを醋酸、アセトン、アルコホル等にて溶解し、之を細い孔より熱氣中に押出して糸とする、三、銅アムモニヤ法は前記の精製リントナー又は木材バルブを酸化銅アムモニヤ溶液に溶解したものを酸又はアルカリより成る凝固液に押出して糸とする、四は消化纖維素法といひ精製リントナーを硝酸に浸し、之にアルコホルを加へ、溶液として後紡絲液(冷水)に押出して糸とする。但し之は乾式法もある、これらの製品の大體の色は白い、しかし消化法の糸は帯灰白色、酸化銅アムモニ

ヤ法は稍乳色或は帶青色である、ウイコーヌは稍黄色を帯び
 醋酸纖維法の品は最も天然絹糸に近い色を呈する、糸の細い
 程觸感は柔かで天然絹糸に類するが、同一の太さではどうし
 ても人絹は粗剛である、光澤はうへ光りがするが近頃は改良
 された、其強力は生糸又は綿糸よりも遙に弱いが、漸次改良
 した、しかしぬれると非常に弱くなる缺點がある、人絹は電
 氣に絶縁性がある、中にも醋酸纖維は最もよいから、將來こ
 の方面で需要されるであらう。

ウイコーヌは米國第一位で世界總額の二割七分に達し、イ
 タリーは一割五分、英獨何れも一割二分、佛、和、日、瑞西
 これにつぐ、醋酸法では英國第一位をしめ總額の三割四分七
 厘之ついで米國一割五分、フランス一割二分、ベルギー四
 分四厘である。

製法別世界人絹會社數(一九二七年)

國別	ウイコーヌ	醋酸	銅アム	消化	不明	計	資本磅
佛	三六	三	二	一	一六	四八	一、二二五
英	一〇	四	二	一	五	三三	四、六〇〇
米	一〇	二	四	一	三	三〇	六、〇〇〇
ドイツ	一七	五	四	一	三	四〇	一、一五〇
イタリア	一七	一	一	一	二	二二	二、二〇〇
ベルギー	八	一	一	一	五	一六	三、五〇〇
スイス	五	三	一	一	五	一五	一、五〇〇
日本	九	一	一	一	五	一七	四、〇〇〇

オランダ 三 一 一 一 一 六 七〇
 オーストリー 二 一 一 一 一 三 二〇〇
 チェッコ 三 一 一 一 一 三 一
 ポーランド 二 一 一 一 一 二 一
 一九一三年代には人絹の生産高は生糸の五割、棉花の三百
 二十分一、羊毛の百〇九分一に過ぎなんだが一九二四年以後
 格段に進み、一九二八年には棉花の三十五分一、羊毛の十分
 一に達し、絹糸の三倍四分となつた、蓋し將來は益々盛んとな
 るであらう。

今一九二八年の世界の製産高をみると、

國別	ウイコーヌ	醋酸法	消化法	酸化銅	計
米國	八、一〇〇	五、〇〇〇	八、〇〇〇	二、一〇〇	九、七〇〇
英國	三、〇〇〇	二、五〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇	五、〇〇〇
イタリア	四、〇〇〇	八〇〇	一	六〇〇	四、八〇〇
ドイツ	六、二〇〇	七〇〇	一	九、〇〇〇	四、九〇〇
フランス	六、六〇〇	四、〇〇〇	二〇〇	五、〇〇〇	三、〇〇〇
オランダ	一、八〇〇	一	一	一	一、八〇〇
ベルギー	二、一五〇	一、五〇〇	一、〇〇〇	五〇〇	一、八〇〇
日本	一、〇〇〇	一	一	一	一、〇〇〇
スイス	三、〇〇〇	一〇〇	一	一	三、一〇〇
其他	一、八〇〇	一、五〇〇	二、四一〇	一	三、七六〇
合計	三〇、二〇〇	二四、九〇〇	一六、九〇〇	一四、六五〇	三九、七〇〇

かうした次第で米國のハルマンは一九四〇年には人絹産額

は現存織物原料品中第一位をしめ、棉花、生糸、羊毛の生産額を激減せしめるであらうといつてゐる。

○日本の人絹

我邦の人絹糸は大正二年鈴木商店が米澤市にツイスコース法による工場を創立したのが嚆矢であつて大正七年之を帝國人造絹糸といふ會社に改名し、大正五年には日本人造絹糸が神奈川縣子安町に出來、同六年には松阪に東洋人絹が出來るといふ風に段々と發達し現在は左の通である。

名	資本	拂込	生産能力日産
帝國人造絹糸株式會社	2,000千圓	3,000千圓	3,000封度
旭絹織株式	2,000	2,000	11,000
東京人造絹糸	10,000	11,500	11,000
三重人造絹糸	500	500	11,000
東洋レイヨン	10,000	10,000	6,500
日本レイヨン	15,000	2,000	2,100
昭和レイヨン	5,000	5,000	11,100
倉敷絹織	10,000	11,500	3,000
日本毛織株式會社	50,000	11,500	1,000
日本ベンベルグ	10,000	11,500	—

かくて大正五年以前は海外から輸入したが、最近五ヶ年には輸入が減退し、昭和元年三、三二一、〇〇〇封度を輸入したけれども、昭和四年には〇になった。

同時に人造絹糸織物の輸出も増加し、昭和四年には二千八

百餘萬圓、數量四千七百餘萬碼を出した、前年の八百餘萬圓に比して三倍に上つた、支那、印度、香港、海峽殖民地、蘭領東インド及フィリッピンいづれも三四百萬圓の價格のものを輸入してゐる、恐らく我國は人絹織物の消費地に最も近いから、益々斯業の發達を助長するであらう。

○地球學岡山支部近況

浦上 宗 衛

第四十二回例會 昭和五年度第一回例會を一月二十六日午前九時より第一岡山商業に開會し左記講演あり多大の感動を與へたり

地理科文檢受験に就いて

島 田 喜 市 君

- 1、勉學の動機
- 2、勉學の方法
- 3、受験の準備
- 4、受験の方法
- 5、受験の感想
- 6、其他

來會者十五名

第四十三回例會 三月九日午前九時より第一岡山商業に開會し我練習艦に便乗し北米南洋を視察されたる岡山市清輝小學校長西山富佐太君を聘して其視察談を聽く來會者二十七名、午後三時閉會す。

- 1、北米南洋視察談 清輝校長 西山富佐太君
- 2、軍の編成に就いて 關 中 水野千里君

第四十四回例會 四月二十七日は長閑な春の日を野外の研究にと左記要項により行ふ來會者二十五名にて盛會なりき。

1、日時(往)四月二十七日午前五時岡山發備備線列車に

より同七時四分并倉驛着下車

(復)午後六時十二分伯備線石壁驛發列車にて同八時三

十一分岡山歸着解散。

2、方面 阿哲郡草間村、豊永村、美穀村、石壁郷村等

の石灰岩地方

3、視察事項

一、旭工業會社のカルシウム製造

二、日本カルシウム肥料會社の石灰製造

三、草間カルスト地方見學

イ、老能附近のドリネ數個

ロ、カルスト耕作景

ハ、羅生門、鹽灘(岡敬泉)

ニ、湯川附近のフズリナ石灰岩採收

四、石灰洞踏査

イ、横の穴

ロ、宮ノ後の大穴

五、大穴、佐伏、岩本、寺内、土橋、唐松地方石灰岩

地形、唐松の蝙蝠穴、陥落地

4、指導者 草間村の元小學校長長谷川隆君、新見農林

學校教諭山口肇太郎君、豊永村小學校長赤木敏太郎君

及び新見高等女學校教諭仲原龍太郎君の四名

第四十五回例會 六月十五日午前九時より岡山第一中學記念

會館に開會左記研究發表あり來會者十七名

雜報

1、岡山城(烏城)に就いて 一中 松本米次郎君

2、新星に就いて 關中 河野千里君

第四十六回例會 九月二十一日午前九時より第一岡山商業に

於て開會左記研究發表ありたり來會者二十二名

1、鐵道貨物輸送に就いて 一商 浦上宗衛君

2、別子銅山精鍊系統に就いて 同 坂本辰馬學士

右終はりて

3、本會事業に就いての協議會

を開き各會員一層の奮發を促し今後書籍、雜誌を讀みて之

を會員に紹介し又はプリント發行をなすべく各會員より其

材料を提供することを約したり

尙文檢問題の研究をなし午後三時閉會

第四十七回例會十月二十六日午前八時二十分岡山發字野線列

車に乘車同九時二十五分字野着直に自動車にて兒島郡日比

町玉なる三井物産造船部玉工場に至り新造船、修繕工場を

參觀し晝食の饗應を受けランチを廻航され直島精鍊所、牛

ヶ首の日連寢像等を巡覽し字野棧橋迄送られ上陸して尙時

間の餘裕ありしを以て耐火煉瓦製造所を參觀し午後五時二

十三分字野發列車にて同六時三十分岡山歸着解散す來會者

十五名なりき

第四十八回例會 十二月七日午前九時より第一岡山商業に開

會文檢問題研究を主とし左記講話ありたり

文檢受験に就いて 二中 坂上長十郎君

三元

七五

右終りて各會員熱心に研究事項の發表、質疑等ありて午後三時解散二十一名の來會者ありき。

○中學校地理教授要目の改正

時勢の進運に伴ひ又輿論の叫びに應じて多年問題になつてゐた中學校教授要目も愈々改正され文部省訓令第五號昭和六年二月七日官報第一二三一號を以て公布せられた今其全文を示せば左の通りである。

地理

地理ノ教授ハ重ヲ日本地理ニ置キ比較的之ヲ精深ニ教授スルモノトス

外國地理ノ教材ハ必ズシモ本邦トノ位置的關係ニ拘泥セズ地理的事情ヲ顧慮シ簡ヨリ繁ニ進ムノ法ニ則リテ排列スルモノトス

教材ノ學年配當ハ便宜中表又ハ乙表ニ據リ第一學年及第二學年ノ每週教授時數ハ歴史トノ關係ニヨリ之ヲ定ムルモノトス

甲 表

外國地理	第一學年 每週(二時)	第二學年 每週(二時)	第三學年 每週一時	第四學年 每週一時	第五學年 每週一時
外國地理	外國地理	日本地理	日本地理	自然地理概論 人文地理概論	

乙 表

第一學年 每週(二時)	第二學年 每週(二時)	第三學年 每週一時	第四學年 每週一時	第五學年 每週一時
日本地理	日本地理	外國地理	外國地理	自然地理概論 人文地理概論

外國地理。大洋洲。

總說。總說ニ於テハ境域・地勢・氣候・生物・國家・住民・産業・交通ノ概要ヲ授クベシ 以下之ニ做フ

各說。各說ニ於テハ各國(又ハ各地方)ニ就テ其大小我國トノ關係ノ多少等ニヨリ境域・地勢・氣候・住民・産業・交通・政治・教育・宗教・都會等ノ事項ニ關シ其分量ヲ斟酌シテ之ヲ授クベシ 以下之ニ做フ

オーストラリア、我方南洋諸島、ハワイ諸島等。

兩極地方。總說。

アフリカ。總說。各說。

南アメリカ。總說。各說。西北部諸國、北部諸國、ブラ

ジル、南部諸國、

北アメリカ。總說。各說。アメリカ合衆國。カナダ、メ

キシコ、中央アメリカ、西印度諸島等、

アジア。總說。各說。滿洲、關東州、支那、印度支那、

マレー諸島、印度、シベリア、アジヤトルコ、アラビヤ
イラン地方、中央アジア、コーカサス等、

ヨーロッパ。總説。各説。ロシア、フィンランド、バルト海沿岸諸國、ポーランド等、スカンジナビヤ半島、デンマーク、オランダ、ベルギー等、ドイツ、スイス、オーストリア、ハンガリー、チエッコ、スロバキヤ等、イギリス、フランス、イベリヤ半島、イタリヤ、バルカン半島、

日本地理。帝國ノ位置。地方誌。總括。

地勢。山脈、河川、湖沼、平野、海岸、島嶼等、

海洋。沿海、海流、潮汐等、

氣候及動植物。

住民。人口、都邑等、

政治。立法、行政、司法、軍備、外交等、

教育。神社、宗教、

産業。農業、林業、水産業、鑛業、工業、商業等、

交通。道路、鐵道、航路、通信等、

自然地理概説。宇宙及太陽系、地球、月、曆、陸界、其ノ

變動、海洋、氣界、天氣及氣候、地勢、氣候、生物相互ノ

關係。

人文地理概説。自然ト人類トノ關係、住民、産業、交通、

國家、世界ノ主要諸國ノ國勢比較、世界ニ於ケル我國ノ地

位、

注意 一、地理ヲ授クルニハ成ルベク事實ノ比較聯絡ニ力メ

特ニ外國地理ニ於テハ我國ノ情勢ヲ以テ比較ノ基礎トナ

スベシ

二、實地ニ觀察シ得ベキ事項ハ成ルベク直接ニ觀察セシメ

其ノ他ハ常ニ地圖、標本、寫眞、繪畫、表等ニ依リ又ハ

之ヲ幻燈ニ映寫シテ生徒ノ知識ヲ確實ナラシムベシ

三、常ニ讀圖力ノ養成ニ力メ且ツ簡易ナル圖表ノ製作ニ慣

レシムベシ

四、人文地理教材ニ關シテハ常ニ其異動ニ留意シテ之ヲ授

クベシ

五、學校所在府縣及之ト密接ノ關係アル地方ニ就テハ特ニ

詳細ニ教授スベシ

六、自然地理概説及人文地理概説ハ特ニ我が國ニ關スル事

項ニ注意シテ之ヲ授クベシ(吉田)

○洛北の古代窯業

洛北愛宕郡岩倉村字木野に今日も

土器をつくり之を民家の祭祀の器具として賣つてゐるのがある、これは流石に京都が古い都であつて、有職の尊ばれる結

果である。古い時代の信仰や祭祀が無くならぬ結果であらう

自から神事に用ひる古い彌生式の土器の需用が今日にもあつ

て、驚くべきこの原始工業がこの幡村から木野の間に残つた

ものである。原料の土は上賀茂丘陵の北にある岩倉盆地にた

まつた洪積湖の湖底粘土、やゝ青い土であるが、それをもつ

て歸つて家内工業として、いかにも簡単な土器をつくる、こ

の土器は所謂彌生式土器である、齋部式の土器になると輓轡

の利用も出來て餘程工程が進歩する。しかしそれよりも一段

古い時代、ロクロがなかつた時代に土器を手でつくつた頃の極めてマイブな原始のまゝの土器工業が嚴然として、この岩倉村の一角に其生命を維持してゐる、スピードの時代にこれは亦驚くべきうれしいことではないか、この事は實は知友河井寛治郎氏の發見であるが陶工としての河井君は嘗てこの地にゆき老嫗が土をこねて之を薄片にする所作をみて感心したものである。カハラケをつくるために、一度はこねた土を薄い板にせなければならぬが、その薄い板にするために、彼女は脇を用ひ、一寸した鍋蓋を巧みに使用したといはれた。蓋しこの古代の「ヒラカ」は祭事のみでなく、有職の使用する所であつて、特に京都に御所があり、禁裏や堂上方の需要があつたために、古來から今日に至るまで、この工業が残存したのである、他の土地ならばとくの昔に影も形もなくなつたことであらう。

天和二年といへば西紀千六百八十二年、四代將軍家綱のころで、世はまだ元祿の華麗な時代に入らなかつた時、この木野を見物した某僧は、北肉魚山行記といふのを今日に残してこの窯業の保存され、且さかえてゐた様子をつけてゐる、忘れぬさきにこゝにそれを摘記しておきたい。

「天和二年四月十八日大原山再遊の志あり、味爽白雲村を出で禁門の前を北へ今出川を東へ、糺の森を西に見、出で、在家河原村を過ぐ。」

この文をよむ丈でも京の白雲村(今御苑内)から御所の前

を北にぬけて同志社前を東に糺の森を西にとあるから、田中村に出たことがわかる。その當時今の田中は在家で河原村といつたとみえる。

「午の下一刻、江文と靜原と一里の間より雨頻にふり已を得ず大悲山圓通寺に入る、寺主性通出迎ふ。明くれば齊を喫し了ると雨亦晴れて、天氣晴明なり、寺主に暇乞し、當地の氏神八幡の社に詣で、それより土器師の町に出づ(この文にてこれが木野であることがよくわかる)、毎家製是、家のニツに大なる竈を設けて、直に土にて鍋やらの形をこしらへ、土器と並べ置く、底ところゝに穴を開け下より籬の葉を新とし、自早晨燒之、至午時火を滅し、翌日土器を出し、京師に賣る(筆者曰く以てその原始的なる工業のさまをみるべし)。

治兵衛といへる者、禁裏院中に土器を獻ず(この家今もあるべし)。

三度、五度、七度、寒鼻など云て大小數品あり(今日はこうした種目はない)此の稱號はみな九獻の酒の次第より名を付く。耳土器等ミ、カハラケを製す、これは晴の御膳の馬頭盤の略にて、堂上衆の膳の上に箸一双を載る物なり、是より東に出、半里許を過て岩倉の里に至る、云々」

これで魚山行記の土器師の説明はすんだ、耳土器はこゝでは馬頭盤の略であるといつたけれども、よく考へると、それは古い飲器で羽觴といふものの形ではなかつたか、樂浪の發

掘物にも漆器のそれが出た。さうするとかうした形は漢代以前から東洋にあつたもので、二千年以前の形式がついさき程まで禁中にのこつてゐて、堂上衆の膳の上に箸一双をのせる物とかはつてゐたといふことになる。

蓋しこの土器は實にその最初が禁裡の御用といふことから出發した、もとは曠曠にゐたが土が無くなつたので、幡村にうつり、木野に住んで御用をつとめたので、一時は土さへあれば繪旨だといふので、人の家でもその下を掘ることが許されて、盛大であつたらしい。近頃になつて禁裡の御用がへつたけれども、京には神社が多いので、神社に用ひられ、明治時代には猶需要が多かつたが、今日では神社でも硬質のものを用ひ一度使用したのを洗つて再び使用するやうになつてから、大にその需要がへつてきた。祭器はその祭祀が終れば破つてすてるべき物である。ロシアの貴族が友人と酒を飲んで親しみを現はすとき、必ずその杯を割るやうに、我國でも古來、一度神に供へた器具は之をすてゝ、常に新たなものを用ひた。さうした習慣が今日にも行はれる、そこで明治時代まではこの木野の土器は、よくうれたのであるが、近頃になつてその風がすたれて段々とこの珍らしい有職の工業は衰微してきかけた。

簡単な土器ではあるが、その發生の原始が極めて遼遠であるといふことや土の有無といふことが直ちにその工業所在地を決定することや、時代によつて盛衰のあること等を考ふれ

ば經濟地理上の問題が多いと思ふ。予は機會を得て更らにこの地を調査して之を報告したい、取敢えずかうしたことを備忘録としておく。(藤田)

○ビルマの石油

石油はビルマで米について第二位の重要特産物である。その探掘の歴史は遠く十三世紀の昔に溯るが、今日の發達は一八八六年英國が上ビルマと併合してからのことで、ビルマ石油會社をつくつて原始的手掘式に代ゆるに近代式機械を用ひ、一九二六年にはペルシヤ及蘭領東インドと共に三大産油國となり、日本の産額の四倍に達し、世界の石油國としては、一米國、ニメキシコ、三ロシア、四ベネズエラ、五ペルシヤ、六ルーマニヤ、七蘭領東インド、八ペルーニついで第九位をしめ英國の重要な油源となつた。

一八八六年以前は年に二百萬ガロンであつたが一九二一年には二億九千六百萬ガロン、百四十八倍の増加となり、一九二一年以後は逐年減少、一九二一年には二億四千五百萬ガロンとなつた。

この石油減産は主としてビルマ油田中最古最大にして其内の一平方哩の一小油田が一九〇〇年以降三十億ガロンに達し全ビルマ第一位の名をもつた Yenang Yaugg ヤナンヤウング油田の産出漸衰によるもので只今ではシング、ミンブ油田地方の新開の方がよくなると思はれる。

ビルマ石油會社は大に發展してビルマのみでなく、ペルシヤでもインドアッサム方面でも活躍し英波石油會社の創設及

經營に關係し資本一千八百八十八萬磅、資産二千萬磅、積立二百二十七萬磅を算し一九二八年の純益百九十八萬磅と稱せらる但し、ビルマ油の日本輸出は皆無である。

○京都帝國大學理學部地質學鑛物學教室の火災

二月十二日午前十一時十五分地質學鑛物學教室玄關上の木造二階家根裏より出火、當時大講義室では松原教授の講義が始まつたところで、煙は向ひ側の生物學教室の小使によつて外部から發見され直に出火場所を見ようとしたが天井裏のこととて消し止めることが出来ず、尋で北側の煉瓦建の家根に火がまつた、元來木造部と南北兩側の煉瓦建との間の屋根裏には防火壁があつたが家根瓦の下の葺板が相接してゐた爲め延焼したもので北側の家根を焼くと同時に南側の家根にも延焼した。南側二階の圖書閱覽室及び書庫所蔵の約二萬冊の圖書は多くは窓から外に投げ出された。出火後一時間半で全教室の屋根を焼き瓦と天井の残りは二階の床に落ちて鎮火した階下標本室の標本は一部外來の應接者によつて投げ出されたが其大部は残つた。搬出された器械、器具、圖書、標本はかなりの分量に達するが破損を受けないものは極めて僅かであり、殊に標本の散佚は取りかへしのつかぬことゝなつた。我が地球學團の編纂事務は階下で行はれてゐたのであるが此の部屋の損害は二階程でなかつた、殊に三月號原稿は十日に發行所に發送済で、四月以後に掲載すべき原稿は總て無事取り出すことが出来た。教室はいかなる形ちに復舊するか未だ判

らないが、内外整理が出来るのは三四年の後であらう。併し「地球」は健全に發行をつゞけることは出来ると想へるし、非常時に於ける奮發が手つゞつて雜誌「地球」は一層進んだものになるであらうと期待してゐる。茲に教室火災の情況を報導し併せて早速御見舞下さつた地學愛好家に深謝する。

急 告

四月四日五日に京都に於て開催すべく豫告してゐいた東京地質學會、岩石鑛物鑛床學會並に我地球學團の講演會は上記京都帝國大學地質學鑛物學教室火災の爲め、準備に手まわり兼ね東京帝國大學に於て矢張り三學會聯合の下に開催することになつた。茲に講演會開催地變更を御報せする。

二月二十日

地球學團